山口大学教育学部研究論叢　第74巻　185頁～190頁　2025年3月

藤田長右衛門作『賓頭盧坐像』についての研究

上原一明、上利英之*

A Study of a Seated Binzuru Statue made by Fujita Choemon

UEHARA Kazuaki, AGARI Hideyuki*

(Received September 27, 2024)

萩市・南明寺の賓頭盧坐像の作者は藤田長右衛門である可能性が高いことが文献により認知されているのに対し、東木間の賓頭盧坐像は作者不詳であるが、その造形様式から鑑みて、同じく彼の製作であると思われる。頭部の造形や全体像の様式、京都や奈良など中央の製作方法とは異なる造りも近似している。両像の３D プリント像による比較でもその近似性は明らかである。同じ萩市内にある両像が藤田長右衛門作である事が証明されることにより彼の業績が再評価され、萩市の文化財が一段と評価される事に貢献されよう。

はじめに

本論文は『南明寺・賓頭盧坐像（藤田長右衛門 作）に関する研究 - 山口県の文化財修復の取組について - 』で取り上げた藤田長右衛門についての継続研究であり、新たに発見された萩市東木間にある賓頭盧坐像と南明寺・賓頭盧坐像との関係を明らかにすることを目的とする。

１，藤田長右衛門の概要

まず、藤田長右衛門とは何者だろうか。三見高等小学校の『箕ノ越焼』、山本勉弥・著、森豊彦・増補の『萩の陶磁器』と上原一明・中野良寿・平川和明・馬場良治・菊屋吉生・上利英之の『南明寺・賓頭盧坐像　右手と宝珠の復元　−山口県の文化財修復の取組について−』によると現在の萩市三見中山で文化・文政年間(1804～1830)頃に焼き物の窯を開き、陶器や木像を製作していた人物である。代表作としては、陶器では嘉永７年（1854）の彫銘のある萩市の個人蔵『張良』や（公財）菊屋家住宅保存会蔵の『神農』（図１）があり、また木像では『南明寺・賓頭盧坐像　右手と宝珠の復元　−山口県の文化財修復の取組について−』において失われた右手と宝珠を修復した萩市椿の南明寺の賓頭盧坐像（図 2）がある。南明寺の賓頭盧坐像に関しては「文久二年壬戌八月吉日」の年記があるというが、実際の調査では坐像本体に年記は発見されず、山本勉弥氏が何かの資料を参考にしたのか、また現在の観音堂の外縁にあった時代に何らかの説明板等があったのかわからず、詳細は不明である。

生没年は『萩の陶磁器』によると、寛政元年（1789）に生まれ、慶応３年（1867）79 歳（かぞえ歳）に亡くなっているという[1]。現在の萩市三見中山に窯を開き、主に焙烙を焼いていたという。今でもその跡は三見中山の旧赤間関街道沿いに残り、そこで焼かれた物は「箕ノ越焼」の名称で呼ばれていた[2]。また三見では「カドナ」という姓名や家業などからつけられる地域内での呼び名があり、三見中山の「カドナ」には「ニンギョウヤ（人形屋）」のカドナを持つ家が存在している[3]。

２，藤田長右衛門と「箕ノ越焼」

萩市三見中山の焙烙窯である「箕ノ越焼」は、窯のある地形が丁度箕の腰の部分のように見えるため、そう名付けられたという[4]。

弘化元年(1845)には窯が１軒で、その後嘉永年間(1848～1853）に編纂された『御両国珎名産』に中山の産品と

＊ 山口県立大学非常勤講師

して「ほうろく」が挙げられている[5]。柏本朝子氏の「三見中山の焙烙窯」には、史料から考えると焙烙を焼いている窯は１軒だけで、他に旅人のお土産用に焼き物の人形を焼く窯があったとしているが、何件の窯があったかは言及してはいない。詳細はこれからの発掘調査等を待たねばならないが、前述の「ニンギョウヤ」というカドナの他に「ホウロクヤ（焙烙屋）」というカドナもある[6]。そのため少なくとも同時期にあったかは不明だが、焙烙窯と人形を焼いていた窯の２軒はあったであろう。

図１　『神農』（公財）菊屋家住宅保存会蔵

図２　南明寺・賓頭盧坐像

図３　『布袋』（全体）山口県立博物館蔵

図４　『児島高徳花入』（全体）山口県立博物館蔵

そして山口県立博物館に「箕ノ越焼」とされる陶器の作品が２点収蔵されている。一つは布袋の人形（図３）で、もう一つは桜の木に寄り添う児島高徳の花入（図４）となっている。山口県立博物館の記録によると、昭和に入ってから収集されたものであるが、箕ノ越焼の製作年代から考えるとおそらくは江戸末期から明治時代初期に製作されたものだろう。製作者は、今まで残っている資料等から藤田長右衛門と考えられるが、これらの作品にはそれぞれ彫印がある。すべて読めているわけではないが、『布袋』には陽刻変形円印「巖」、陽刻方形印「□□」（図５）、『児島高徳花入』には陽刻変形長方印「正木」（図６）とある。藤田長右衛門には別銘、もしくは別号として「長貞」という号があるが、それのどれとも一致しない。藤田長右衛門の別号が複数あり、これらの作品にある号や名が長右衛門の別号であるということも考えられる。しかし『布袋』は長右衛門作の特徴もいくらか見えるが、『児島高徳花入』はあまり長右衛門の作風は感じられない。そのため、これらの作品から「箕ノ越焼」の窯は複数あり、人形を焼いていた人物は何人かいたのではないかとも考えられ、藤田長右衛門窯以外の数軒窯があったと考えてもよいのではないだろうか。

図５　『布袋』印

図６　『児島高徳花入』印

３，　南明寺・賓頭盧坐像の造形について

南明寺の賓頭盧坐像の体躯は樟で彫られており、内刳りは無く、頭部と左右の手は嵌め込みである。右手の宝珠は別材で四角いホゾで固定している。腹部には木の腐食箇所を隠すため別材で四角い蓋を嵌め込んでいる。右腕と左臀部は木の腐食箇所を埋木している。一木造りのため膝前や背面に大きなひび割れが生じている。表面は胡粉で下地を施し、彩色されていたが現在は全て剥落している。背面の衣の溝にわずかながら顔料が残っている。（図７）

当坐像の造形方法について、頭部と手部を嵌め込む一般的な構造である。京都や奈良の中央公所直営の工房の確立された製法ではなく、地方で製作されてたものであると思われる。中央工房製作のような身体骨格の正確さや明確で鋭い彫り方ではなく、ゆったりとした素朴な彫り方だからである。また、腹部の四角い蓋や右腕と左臀部の埋木も雑である。しかしながら、他に類を見ないエキセントリックなその造形はとても魅力的である。

図７　南明寺・賓頭盧坐像　背面

図８　南明寺・賓頭盧坐像　底面

４，東木間・賓頭盧坐像の造形等について

東木間の賓頭盧坐像の体躯は、膝前と胸部から臀部中央、臀部左右が底辺部において楔で固定されている。内刳りはされていない。頭部と左右の手は嵌め込みである。左手と宝珠は一木造りである。左下臀部は別材で補材されている。表面は胡粉と和紙で下地が施されており、激しい剥落はあるが全体的に彩色は残っている。（図９）（図10）

図９　東木間・賓頭盧坐像　正面斜め

図 10　東木間・賓頭盧坐像　背面

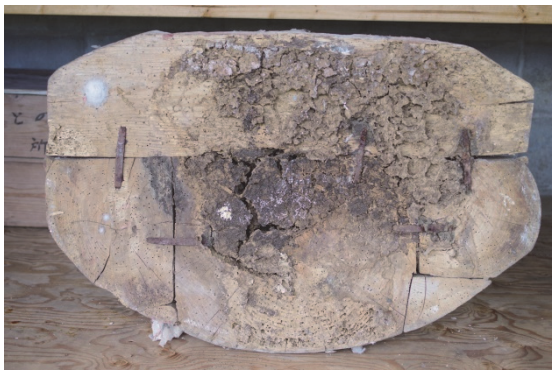

図 11　東木間・賓頭盧坐像　底面

今回取り上げた萩市東木間の賓頭盧坐像は、最初に萩市文化財保護課の柏本秋生氏に地元の方から連絡があり、以前に南明寺の賓頭盧坐像の調査等の件があったことから上利の方に連絡があり、南明寺の賓頭盧坐像の調査に関係した人物で調査をすることとなった。

地元の方によると、像は「オヤクシサマ」、「ヤクシサン」と呼んでおり、夏の地蔵盆の時期と春の花祭りの時期にいわゆる「お接待」を含むお祭りを行っているという。また昔のお堂の場所は、もっと北にあったといわれている。現在のお堂の横に昭和初期にお堂を移した際の記念と思われる石碑があり、またお堂の近くに古い石灯籠もある。お堂の入口には電球が一灯ついており、常夜灯で今でも使用しているということである。

また実際に撫でていたが、修理をしたという話はない、ということから、今ある「オヤクシサマ」の色や形は制作された当時のままの可能性は高いであろう。そして関連する文書は今のところ存在しない。そのため、誰がいつ頃この「オヤクシサマ」を発注したのかはわからない。

お堂の中には賓頭盧坐像以外にも厨子に入った仏像と、2 体の石仏、その他祭礼等で使用していた道具が置かれている。(図 12)

図 12　東木間の堂内

5，両賓頭盧坐像の比較

南明寺の賓頭盧坐像の寸法は、高さ 85 ㎝、幅 92 ㎝、奥行 64 ㎝である。片や木間の賓頭盧坐像の寸法は、高さ 60㎝、幅 76㎝、奥行き 47㎝ で前者と比較すると 7 割ほど小さい。双方頭部と左右の手が嵌め込みであることは同様だが、南明寺像が体躯を 1 木で彫刻されている一方、東木間像は膝前と胸部から臀部中央、臀部左右の 4 つの部材で構成されている。また南明寺像は左手を表に挙げ、右手に宝珠を持っているが、東木間像はその逆である。東木間像の持ち方が一般的であるが、その理由は定かではない。宝珠についても南明寺像は嵌め込みであるが、東木間像は左手と一木で彫られている。しかしながら、全体的な造形的特徴は近似している。特に顔について言及すれば、彫りの深い額の皺や盛り上がった丸い眉毛、大きな鼻に笑顔で盛り上がった頬など独特な造形であり、同一の作者であるといえよう。(図 13)（図 14）

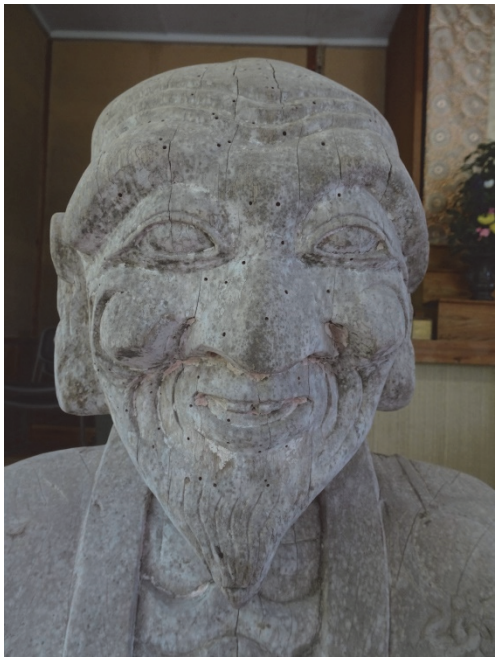

図 13　南明寺・賓頭盧坐像　顔面

図 14　木間・賓頭盧坐像　顔面

製作された順序は記録が無いため定かではないが、南明寺像より東木間像は計画的に製作構成されており、肩幅がゆったりと造形されバランスがとれていることから、南明寺像が先に製作され、その後木間像が製作されたのではないかと推測される。前者の製作経験が後者に生かされているからである。

両像を同じサイズに3D プリントした像で比較するとその近似性がよく分かる。二体とも高さ 75㎜に統一しており、南明寺像がおよそ 11 分の 1 スケール、東木間像がおよそ 8 分の 1 スケールの縮小である。顔の造形や全体のバランスがほぼ近似しているが、前者の窮屈な肩幅に対して後者はゆったりしている点や、前者の膝前の衣の襞の造形より、後者の方がしっかりと彫られている点など、造形的経験の進歩の変化がみられる。

図 15　南明寺像（右）と東木間像（左）の3D 模型比較

6，藤田長右衛門と南明寺『賓頭盧坐像』

現在南明寺にある『賓頭盧坐像』は藤田長右衛門の作とされる。前述の『萩の陶磁器』に「私が関知するところでは、沖原南明寺の観音堂椽側に安置してある“ベンズル様”だけである。これも署名はなく年時は『文久二壬戌八月吉日』とある。」とあるが、これより以前の箕ノ越焼の調査記録である昭和 8 年 3 月の三見尋常高等小学校『箕ノ越焼』には木像に関する記述はない。そのため『萩の陶磁器』にある記述は山本勉弥氏の調査によるものと考えられ、現在はどこにも見受けられない年記もその調査の際には何かしらの形であったものであろう。しかしながら南明寺の賓頭盧坐像を藤田長右衛門の作とするための根拠は示されていない。そのため今後の詳細な調査で長右衛門作が否定される可能性はあるが、現在は山本氏の説を支持するのが妥当であろう。そのため、南明寺賓頭盧坐像と造形的特徴が近似している東木間の賓頭盧坐像は藤田長右衛門の作とするべきだろう。

今後の課題とまとめ

現在の東木間の賓頭盧坐像は地元の方のお陰で彩色が残っている。しかし、安置してあるお堂はコンクリート製ではあるものの、天井には雨漏りの跡があり、扉に網戸の網を貼り、格子から大きな虫は入らないように処置は施してあるが、扉の隙間などから小さな虫は入ってしまう状態である。また像そのものに多くのキクイムシによる穴が無数に空いており（図 16）、像の下部はシロアリの被害を受けた痕跡（図 17）も見受けられる。また数度調査を行ったが、少しづつ彩色の劣化やキクイムシの被害も増えているように見られた。そのため、出来るならば本像を博物館などの燻蒸ができ、良い環境で保存できる場所に移動するのが望ましい。防犯の意味でも近代的な建物の中で保存する必要があるだろう。

また以前、南明寺の賓頭盧坐像を 3D プリンターで 3 分の 1 スケールの像の製作が行われた。もし東木間の賓頭盧坐像を博物館等に寄託した場合、南明寺の事例を参考に 3D プリンターで製作した像を代替にするという案も考えられないだろうか。

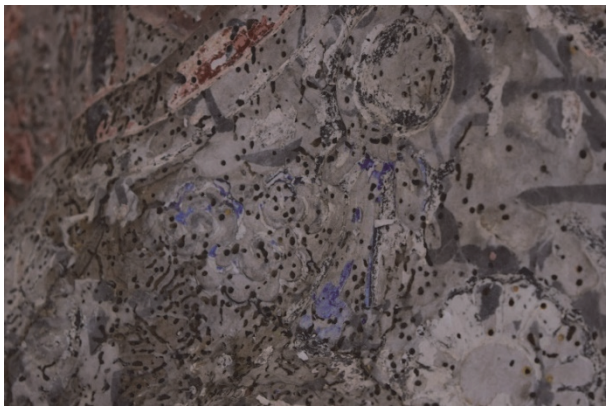

図 16　キクイムシによる穴

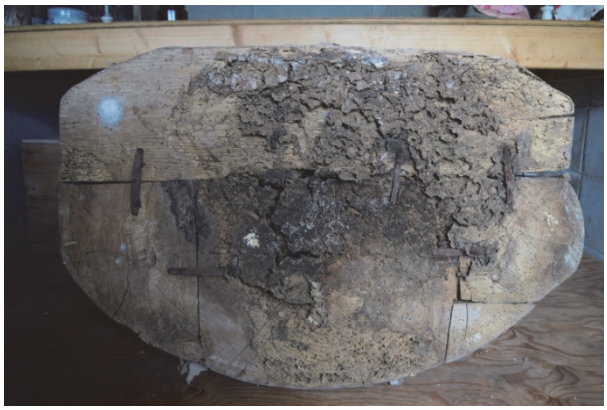

図 17　シロアリの被害を受けた痕跡

以上、南明寺と東木間に安置されている賓頭盧坐像の作者である藤田長右衛門について、彼の沿革と彼をとりまく当時の萩の状況、また両賓頭盧坐像の造形様式の比較を通して、作者が藤田長右衛門であると結論をつけた。また、劣化の著しい東木間の賓頭盧坐像の保存とその代替案を提示することにより、地域を守護してきた当像の適切な扱いにつなることができれば幸いと考える。

本論文は、はじめに・第 3 章・第 5 章を上原、第 1 章・第 2 章・第 6 章を上利、第 4 章・今後の課題とまとめを二名で分担執筆した。

謝辞：
本論文執筆にあたり、柏本秋生氏、中村建夫氏、原川里美氏、小峠昭治氏、また 2 体の３Ｄプリント像提供の堀川裕加氏、城裕喜氏他、多くの方々のご協力をいただいたことに感謝申し上げます。

注釈：
1）上原一明・中野良寿・平川和明・馬場良治・菊屋吉生・上利英之の『南明寺・賓頭盧坐像　右手と宝珠の復元　−山口県の文化財修復の取組について−』　山口大学教育学部研究論叢　第 70 巻　2021 年　山口大学教育学部　p234
2）柏本朝子「三見中山の焙烙窯について」『新・史都萩 第 4 号』2002 年　史都萩を愛する会
3）『萩市郷土博物館研究報告　第 5 号』1993 年　萩市郷土博物館　p18
4）山本勉弥・著　森豊彦・増補『萩の陶磁器』1983 年（第 4 版）p97
5）前掲「三見中山の焙烙窯について」
6）前掲『萩市郷土博物館研究報告　第 5 号』p18
7）前掲『萩の陶磁器』p98　6 行目

参考文献：
三見高等小学校『箕ノ越焼』1933 年
山本勉弥・著、森豊彦・増補『萩の陶磁器』1983 年（第 4 版）
上原一明・中野良寿・平川和明・馬場良治・菊屋吉生・上利英之　『南明寺・賓頭盧坐像（藤田長右衛門 作）に関する研究 - 山口県の文化財修復の取組について - 』、2021 年、山口大学教育学部研究論叢　第 70 巻
柏本朝子「三見中山の焙烙窯について」『新・史都萩　第 4 号』2002 年　史都萩を愛する会
『萩市郷土博物館研究報告　第 5 号』1993 年　萩市郷土博物館